

## 「現場を知り、現場から学ぶ」をモットーに

植田浩史 経済学部 教授

「何にでも関心を持つ」というモットーに、大学の外に出て、企業と地域の現実から、世界と日本の経済の動きや今後の課題について学んでいます。

植田浩史研究会は、植田が慶應義塾に着任した2006年にスタートした新しい研究会だ。研究会では、産業・

企業の現実の具体的な姿から世界経済、日本経済、地域経済が抱える問題を考察することを課題としている。そのため、教室で本を読むだけでなく、大学の外に出かけ、「現場」から学ぶことを大切にしてきた。

なかでも、3年生は毎年夏合宿として2泊3日で特定の地域の企業を訪問し、社長さんから話を伺い、現場を見て、その地域や企業の課題を考えている。最近では北海道に行くことが多く、農業を基盤に多様な食品産業を發展させてきた十勝・帯広地域、冬場に海外から多くの観光客が集まるニセコ・倶知安地域などを訪問している。

最近の慶應義塾の学生は東京近辺出身が多く、地方の産業や企業がどのような経済活動を行っているのか、具体的なイメージが持てない場合が多い。それだけに、地方を訪問して直接地域

の産業や企業を肌で感じ、経営者の方から話を伺う機会は、貴重な経験になっていると思う。

今年度訪問した十勝では、先行して六次産業化を進め、こだわりの牧場をお持ちの経営者、北海道の農産物や水産物をアジアに売り込む取り組みを進めている方、大手企業から父親の経営する中小企業に戻り十勝の大豆にこだわって豆腐の新商品開発を進めている若手専務など、現場を訪ねてそれぞれの思いを生の声で伺い、ディスカッションしてきた。学生たちもそして私自身も大いに触発され、勉強になったことは言うまでもない。

今、10年先、20年先がなかなか見えない時代になっている。それだけに、学生には、いろいろなことを学び、経験してほしい。2年間の研究会でできることはわずかなものだが、植田研究会でしか味わえないことを経験し、学んでもらえれば幸いである。

### 充実したゼミ生活

尾崎育実君 経済学部3年

今年で10年目を迎えた植田研究会は、文献研究やフィールドワークを通じて、実際の産業や企業を多面的な角度から分析しています。

植田先生は幅広い人脈をお持ちなので、フィールドワークにおいては大学生だけの力ではお会いできないような方々からお話を伺うことができ、企業の現場だけでなく、人生論も学び、自分の見聞を広げることができる貴重な経験をしました。

また、植田先生は積極的に飲み会にも参加され、ゼミ生との交流を大事にしてくださるので、みんな自然とゼミに対する気と愛が芽生え、個性あふれるゼミ生たちと充実したゼミ生活を過ごしています。



## くすりの効果の個人差を科学する

おおたにひさかず  
大谷 壽一

薬学部 教授

くすりの効果や副作用、飲み合わせの起こりやすさには個人差があります。そうした個人差を解明して、くすりをより良く使うための情報作りに取り組みます。

同じ量のくすりを同じように服用しても、副作用が起こりやすい人と起こりにくい人がいます。飲み合わせ（相互作用といいますが）が強くなる人とはあまり出ない人がいます。なぜ、くすりの副作用や相互作用のリスクには個人差があるのでしょうか。どのような要因が関与しているのでしょうか。投与前にそのリスクを知ることができないのでしょうか。私たちの研究室「臨床薬学講座」では、こうした疑問を解決するための研究を進めています。研究対象となるものには、体質、すなわち遺伝的な要因もありますし、病態や併用薬などの後天的な要因もあります。研究のための方法論も、遺伝子レベルから酵素、細胞、小動物を用いるもの、コンピュータを用いたシミュレーションや解析など、多岐にわたります。近年では、体内で薬物を解毒代謝する酵素に遺伝的な個人差があり、それによりくすりの飲み合わせの強弱が影響を受けることを明らかにしました。

臨床薬学講座には、薬学部薬学科4

年生、薬科学科3年生が、毎年秋に計10〜12名配属され、卒業まで所属します。また大学院の修士課程、博士課程の学生も所属しています。当研究室では、医療人・社会人としての規範意識を高めつつ、研究者としての柔軟な発想力を養うべく、「規則を破らず、常識にとらわれず」を念頭に、学生とともに教育研究を行っています。学生たちは、各自がテーマを持って研究に取り組んでいますが、一方、講座セミナーでは、研究報告や英語論文の抄読会、新薬の情報を読み解いて評価する「ドラッグ・モノグラフ・セミナー」などを通して、くすりの専門家として活躍するための幅広い知識、技能の向上に努めています。また毎年夏には米国やタイから薬学生を短期実習生として受け入れるなど、国際交流にも取り組んでいます。

最終的には、講座から巣立った皆さんが、幅広い領域で社会の先導者として活躍してくれることを、何よりも楽しみにしています。

### 全力投球な“りんやく”での毎日

かめい ゆり  
亀井 佑莉君 薬学部薬学科6年

臨床薬学講座、通称“りんやく”を一言で表すと「全力」です。研究においては、日々「どうすればいいか」と試行錯誤を繰り返しています。研究に熱中するあまり、気がついたら深夜になっていたなんてことも……。しかし、それでも諦めずに研究に取り組み、結果が出せるのは、同期や先輩、そして厳しく温かく見守ってくださる先生方がいるからに違いありません。

もちろん、毎日毎日夜遅くまで研究しているわけではありません。BBQや旅行、運動会(!)とイベントも豊富で、先生方も交えて全力で遊んでいます。

研究にもイベントにも全力投球な“りんやく”での日々も残りわずかです。寂しさを感じずにはられません。

